

# 「1940年代末、江蘇省青浦県における 地籍台帳と地籍公布図」補論

——地目「什地」をめぐって——

稲 田 清 一

今秋公刊した前稿<sup>(1)</sup>において、青浦県佘山郷（現上海市松江区佘山鎮）で1949年に作成されたとみられる2枚の地籍公布図とそれに関連する地籍台帳について紹介した。これらの史料は、2004～2006年度にわたる「清末民国期、江南デルタ市鎮社会の構造的変動と地方文献に関する基礎的研究」を課題とする科研（課題番号16320098、研究代表者：太田出）にもとづき、「地方文献」を求めて江南地方各地の図書館や檔案館を調査する過程で見出されたものであった。

これらの地籍史料は、日中戦争期中断をはさみ1930年代と40年代に、自作農創設を最終目標に掲げ、土地所有権を確定して税収を確保するために、中国国民党が進めた近代的な測量をともなう土地整理事業によって産み出されたものであった。これまでこの種の史料が紹介されることはほとんどなく、前稿の考察も初歩的な手探りの段階を出ていない<sup>(2)</sup>。本稿では、前稿の補論として、そこで提出した論点のひとつ——什地をめぐるとの問題——について、その後の現地再訪によって知りえた知見を報告しておきたい。

さて前稿では什地についておおよそ以下のような指摘をおこなった。

（1）什地という地目は1930年代の戸地測量の規定などには見出せないが、旧青浦県佘山郷の2枚の地籍公布図——広富林鎮をふくむ公布図（前稿では「広富林図」と略称）とその東に隣接する旧張家村（行政村）の一部についての公布図（同「張家村図」）——を対象に地目別に統計をしてみると、少なからぬ比重を占めていること（表1）、さらに什地の所有者は同一エリア内において宅地を所有する傾向が顕著にみられることに着目した。

表1 地目別統計

	広富林図				
	筆数	畝数	筆数	畝数	畝/1筆
宅	146	66.344	33.3%	20.4%	0.454
什	115	57.050	26.3%	17.5%	0.496
田	94	166.681	21.5%	51.2%	1.773
水	2	1.962	0.5%	0.6%	0.981
坟	81	33.828	18.5%	10.4%	0.418
不明(坟)	—	—	—	—	—
総計	438	325.865	100.0%	100.0%	0.744

	張家村図				
	筆数	畝数	筆数	畝数	畝/1筆
宅	38	35.536	11.6%	5.2%	0.935
什	58	25.791	17.7%	3.7%	0.445
田	201	616.288	61.3%	89.5%	3.066
水	2	1.005	0.6%	0.1%	0.503
坟	28	9.784	8.5%	1.4%	0.349
不明(坟)	1	—	0.3%	—	—
総計	328	688.404	100.0%	100.0%	2.105

(2) 什地とは家屋の前後にある空き地で野菜などを栽培する土地であり、今でいう自留地のようなものだ、との2006年8月における現地でのインタビューから、それは「本来、宅地とセットで、菜園あるいは作業場や家畜・家禽類の飼育場など多様な用途にあてられた土地を指す」との見通しを導いた。

(3) その上で、農民による宅地・宅基地所有のもつ「本源的意义」を説く森正夫氏の研究、1960年代初めの経済調整期において自留地の重要性を説く陳雲の提言などに触れつつ、小農民や都市小民にとっての生計維持という観点から、什地のもつ重要性に注意を喚起した。

以上の見通しをふまえ、今年の夏、現地を再訪し聞き取りをおこなった。以下は、什地に関連する部分をノートから抜粋したものである<sup>(3)</sup>。

【A】 什地というのは聞いたことがない。〔野菜などを植えた——稲田による補足。以下同じ〕 零細地は宅基地とみなされる。

—— (旧広富林鎮在住 79歳 [数え年。以下同じ] 中農出身)

【B】什地とは竹藪や墳墓などで誰も管理していない土地のことだ。放牛するなど、誰でも勝手に利用できた。

——（旧広富林鎮在住 85歳 松江県城の商店で働いた経歴をもつ）

【C-1】大豆や野菜などを植えた土地を什地という。解放前にも〔什地という語は〕聞いたことがある。人々はそれを<行頭地>〔<行地><行頭>とも略称される〕と呼んだ。家屋脇の零細な土地である。房地〔宅地〕と什地は同じものだ。

【C-2】什地・什基田という語は解放前からあった。聞いたことがある。

——（旧広富林鎮在住 94歳 もと<図正><sup>(4)</sup>）

【D】什地とはおもに野菜などを栽培する家屋周辺の土地のことだ。野菜のほか竹や果樹を植えることもある。子供のころ、解放前から、この語はあった。いわゆる<十辺地><sup>(5)</sup>のようなものだ。

——（旧広富林鎮在住 69歳 中農出身）

【E】〔什地というのは〕知らない。野菜を植えたところは<行頭地>だ。土地のことばで<行頭地>という。竹藪は<行頭地>ではない。

——（旧広富林鎮在住 86歳 貧農出身）

【F-1】什地が野菜などを栽培する土地のことだというのは知っているが、ここには正規の什地はない。竹園や池塘は什地ではない。広富林鎮にも什地はなかった。

【F-2】<行頭地>はどの家にもあった。野菜を植えたのが<行頭地>だ。〔我が家でも〕1分ほど作っていた。

——（旧張家村在住 81歳 下中農出身）

【G-1】宅基田と什基田は同じものだ。我が家にはなかった。

【G-2】什地というものもあった。零細な地片で、野菜を植えたのもあれば、水稻を栽培するものもあった。我が家にはなかった。<行頭地>は水稻栽培が

できない土地のことだ。必ずしも家屋の脇にあるとは限らない。借りた田〔の一部〕に作れば、その分も小作料を納めねばならなかった。

——（旧陳家村在住 76歳 貧農出身 解放後は大隊幹部）

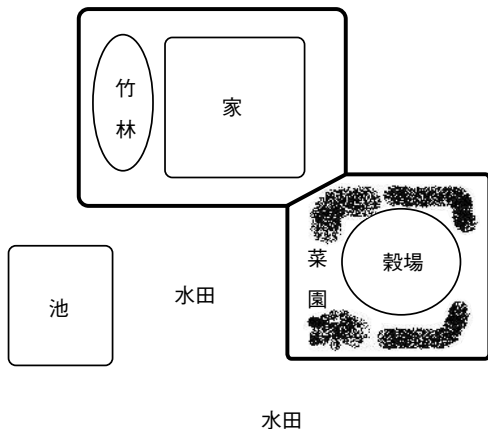
これらのインタビューからは、什地という地目が一つの範疇として確乎として観念されていたようにはみえない。「什地とはなにか」という問いに対する答えは人により区々であり、合わせればほとんどすべての地目におよんでいる。そもそも什地という地目自体が近代の土地調整事業において導入された範疇であることを考えれば、こうした結果は当然であるともいえる。ここで筆者が問題にしたいのは、それが在来の土地利用の形態や範疇とどう関連するのか、という点である。この点に着目するとき、上のインタビューからは、什地という地目に含まれる土地利用の形態として伝統的、慣行的に使用されてきた範疇が、いくつか見出せるように思う。

インタビューでしばしば竹園にふれられているのは、たとえば「広富林図」にえがかれた鎮のメイン・ストリート北側に並ぶ宅地の裏手に位置する什地の多くが、かつては竹園だったことをすでに我々が知っており、竹園は什地の範疇にふくまれるのかと問うたからである。それに対する答えはおおむね否定的であり、竹園はむしろ宅地の一部とみなされていたようだ。ちなみに人びとは水田にも菜園にもむかない地を竹園としたといい、その用益性に対する評価は低かったが、いっぽうで筍は食用に供し、竹は農具などの資材として用いたとされ、竹器製作のために近隣地域から買いつけの需要もわづかながらあったともいう。居宅の背後を竹園にすることは、明清時代から一般に行われていたことであり（本稿註（6）を参照）、これも伝統的な土地利用法の一つであった。

インタビューからは、竹園以外に少なくともさらに2種類の伝統的、慣行的な土地利用の範疇が見出される。〈行頭地〉と〈什基田〉とである。

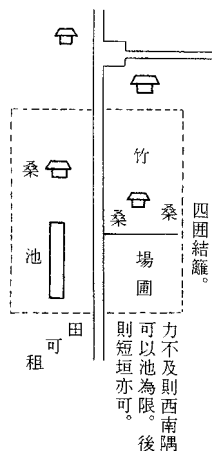
〈行頭地〉とは、家屋の周囲や水田の縁などの零細な空き地を利用して自家消費用に野菜などを栽培する菜園を意味している。こうした土地利用法が、現在ではしばしば自留地や〈十辺地〉とのアナロジーでとらえられていることは、前稿でも述べた。〈行頭地〉の呼称が現地では今もひろく知られていることは、上のインタビューから明らかであろう。什地の語を知らないと答えた人にも

図1 【H】氏 宅地およびその周辺



<行頭地>を知らないものはない。これを什地の言い換えとみるか、宅地の一部とみるかは意見の分かれるところだが、たとえば旧陳家村出身の【H】さん（83歳）は、生家周辺のかつての土地利用の配置を図1のように回想してくれた。【H】さんの父は3人兄弟だったが分家はしておらず、一族で30余畝の土地を所有し、長工2人を雇って経営していたという。土地改革時には地主に階級区分されたが、実質的には富農であったといえよう。【H】さんによれば、居宅とその脇の竹園は宅地だが、穀場（農作業用の空き地）とその周囲的菜園すなわち<行頭地>は宅地には数えないという。田でも宅地でもない後者が土地整理事業において什地に分類されたことはほぼ間違いなかろう。興味深いのは、この図1が明末清初期の浙江省桐郷県の人、張履祥の描いた当時の経営地主の宅地図と基本的に同じであることである（図2）<sup>〔6〕</sup>。張履祥は<行頭地>という語こそ用いていないが、農家における菜園（「圃地」）の重要性を強調すると

図2 明末清初の宅地図



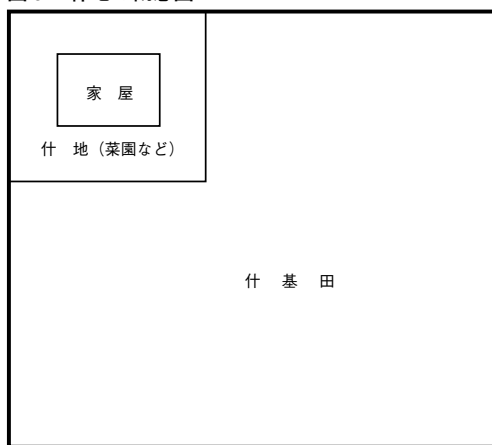
※張履祥『楊園先生全集』卷五「与何商陰」附図  
小山正明『明清社会経済史研究』（東京大学出版会1992年 305頁所引）に拠る。

ともに、「場」と「圃」——図1の穀場と<行頭地>——の季節的な互換性にも言及している（『補農書校釈（増訂本）』前掲，126-127頁）。また果園とならべて竹園の有用性も指摘する（同前177頁）。地籍公布図中の什地の大部分は竹園と菜園——<行頭地>とからなっていたものと考えられる。張履祥の記述はこうした什地の由来の歴史的継続性を示唆していよう。前稿で什地として主に想定していたのはこの種の土地であった。

低湿な圩田地帯に位置する広富林一帯で什地とされたのは、地形からみれば、多くは水田にむかない微高地であった<sup>(7)</sup>。しかしそうではない什地も存在したようだ。

伝統的、慣行的に使用されてきた土地利用のもうひとつの範疇は<什基田>である（【C-2】）。【C】さんは什地について図3のような概念図を示したうえで、<什基田>とは水田であると明言された。これは上述【G-2】にいう「水稻を栽培する」什地に相当するであろう。今夏の調査では、公布図上では什地とされているものの実際は水田であったという事例をいくつか見出すことができた。前稿でも<什基田>の語には言及したが、その内実については突き詰めることをせず、宅地と地続きのさまざまな用途に使われる土地というほどの意味

図3 什地の概念図



に解して論を進めた。しかし<什基田>という概念は、現地の人びとの間に慣行的に成立していた、もう少し明確な範疇ではなかったろうか。【C】さんは図3を解説して「田底権があつてはじめてこのようにすることができる」ともいう。このことは、家屋の敷地としての宅地、その周囲の什地（菜園など）、さらに什地に接する水田を1セットとして所有するということが、農民の本来的ありかただということを示唆しているのではないだろうか。このような宅地に隣接して所有された水田がその他の田地一般と区別され、とくに<什基田>ないしは<宅基田>（【G-1】）という語で呼ばれていたとすれば、宅地についてと同様、それを持つことの「本源的意味」（森正夫氏による）が考察されなければならないだろう<sup>(8)</sup>。最後にこれにかかわる1事例を紹介しておこう。

上記インタビューに応じてくれた【E】さんは今年86歳、1922年戌年、広富林鎮施家浜の生まれ。解放前には7畝の租田が陸家涇にあり、地主は張家村人だった。居宅の前〔南側〕に1畝の自田を持っていた。11歳から3年ほど小学校にかよった。その後は泥水匠〔左官職人〕だった父から仕事を教わった。16歳のとき〔1937年〕父が亡くなったので、その後は他人についた。20歳前に独

図4 【E】さんの宅地およびその周囲

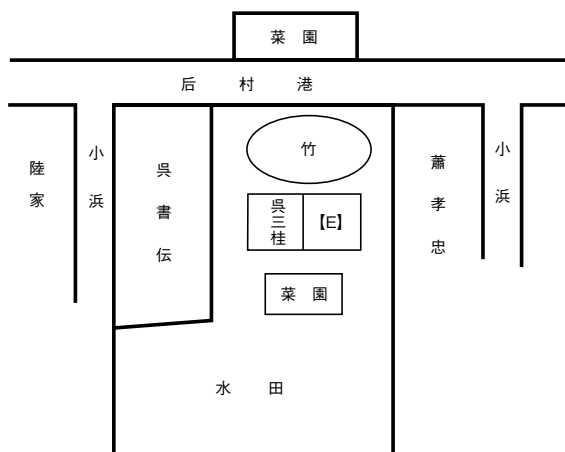


図5 【E】さんの宅地附近（「旧広富林図」）



立し一人前の職人となり、農閑期には職人として働き、農繁期には田を耕した。解放後までこうしていたが収入は少なく、生活は苦しかった。野菜などは家の周りに植えた、居宅前のそれは〔インタビューをしていた部屋を指し示し〕これくらいだった〔6畳ほど〕。家の北側は竹園だった。西隣りは吳書伝、東隣りは蕭孝忠といい、吳三桂と父とは一棟の家屋だった。土地改革では貧農に区分された。極貧戸だった。1951-52年ころ椎間板ヘルニアを患い〔それまでの仕事を続けられなくなり〕、以後は「集体」〔村などの機関〕の配慮により事務室での軽い仕事などを与えてもらった。

【E】さんの話しをもとに宅地の様子を図に示したのが図4である。それを1949年当時の「旧広富林図」（図5）と対照してみると、配置については図



表2 吳永全名義の土地

地号		地目	業主姓名	面積(畝)
正式	暫編			
1532	82	宅	吳永全	0.493
1529	83	什	吳永全/吳三桂	0.566
1527	85	什	吳三桂/吳永全	0.147
1526	86	田	吳永全	1.249
1525	141	什	吳永全	0.320

4とおおよそは一致するとみることができよう。図5中に「吳永全」とあるのが【E】さんその人である。宅地上方のクリーク北側は「旧広富林図」の範囲外であり地割りの記入はない。宅地は一つ家屋の吳三桂とは分けて記されている。宅地の南に隣接して吳三桂と共有名義の什地2筆があり、そのさらに南に吳永全単独名義の田地と什地がある（表2）。しかし、居宅の南にあったという6畳大の<行頭地>が宅地に隣接する1529号の什地（0.566畝）に相当するとは考えがたい。0.566畝は約114坪余り（1畝は約6.666アール）にあたり、大きさがかけ離れすぎているからである。極貧戸で階級成分も貧農だったという解放前後の【E】さんの境遇を想起するとき、公布図にある土地所有の規模は少し豊かすぎるのではないかとの感を拭いきれない。【E】さんのいう居宅南面の6畳大の<行頭地>は宅地南辺にあり、それに隣接する1579号と1927号の什地（2筆併せて0.7畝余り）が「水田1畝」だった可能性を捨てきれないように思う。確認する機会があればと願っている。

補論とは題しながら、本稿で前稿より議論が進んだわけではない。この夏の聞き取りで<行頭地>という語を知ったこと、それによってあらためて<什基田>という概念に目を向けさせられたことを報告して稿を閉じることとした。こうした基層社会における土地の種別を分類する伝統的な用語・概念が、1930年代の戸地測量規則にはない「什地」という地目名称を土地整理事業当局に採用させたのだろうか。

## 註

- (1) 拙稿「1940年代末、江蘇省青浦県における地籍台帳と地籍公布図」太田出・佐藤仁史編『太湖流域社会の歴史学的研究』汲古書院 2007年 所収。前稿とは、以下この拙稿をいう。
- (2) この時期の中国における土地整理事業については、近年、新たな研究の展開が始まっている。その特徴のひとつは、事業の進行にともなって作業の現場で作成されたであろう、公布図などをはじめとする生の文書類の発掘とその活用にある。『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』第2号（大阪大学文学研究科片山剛研究室 2007年）参照。
- (3) 2006年および2007年の夏におこなった聞き取りの全記録は別に公刊を予定している。
- (4) 図正とは、政府の発行する納税通知書を各納糧戸に配ることを主たる役目とする郷村役の名称である。佘山郷ではこれを「保正」と呼んでいた。山本英史「清末民国期における郷村役の実態と地方文献」（太田出・佐藤仁史編『太湖流域社会の歴史学的研究』前掲、所収）を参照。
- (5) <十辺地>とは、耕地以外の「田辺」「場辺」（農作業場の傍ら）「路辺」「溝辺」「塘辺」（池の傍ら）「圩辺」「岩辺」「屋辺」「坟辺」（墓の傍ら）「籬辺」（垣根の傍ら）などで植物の栽培できる空き地をいう（『陳雲文選（1956-1985年）』中共中央文獻編輯委員会編、人民出版社、1986年、360頁、注釈102）。
- (6) 陳恒力校釈、王達參校・増訂『補農書校釈（増訂本）』（農業出版社 1983年）179頁には「前場圃，後竹木，旁樹桑」とある。
- (7) 小島泰雄氏のご教示に拠る。また同氏「中国村落の耕地分布の現代的編成」（『神戸市外国語大学外国学研究所研究年報』33 1996年）8頁、参照。
- (8) 前稿では陶煦『租覈』中の一節に「宅基田」という語が現れることを紹介し、それについての著者の解釈を示した（前稿176-177頁）。